

2022 年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	田中 タ子
研究テーマ	平安時代の仏像と信仰に関する心性史—六国史、『貞信公記』における「修善」を中心に—
研究概要	仏教伝来より現在まで仏像を造り、祈り続けてきた日本の宗教文化の特質を明らかにするため、平安時代前期の六国史と『貞信公記』における「修善」を考察して、仏像を造り祈る行為の背景にある環境（歴史、社会、習俗、宗教）と心性の形成と展開を解明する。

1. 研究活動の概要と研究成果	<p>2022 年度は、平安時代前期の「修善」という言葉を六国史と『貞信公記』から考察した。「修善」は善を行うことであり、止悪修善は仏教の基本であった。先行研究の研究対象では、主に造像や経典書写等が修善・作善として扱われてきた。8 世紀末～10 世紀初頭に成立した六種の史書（六国史）の内、修善の目的は攘災であり、そこで行われた仏事の内容は、経典読経、布施・度者を許すこと等であった。修善は、主に豊穰や遣唐使の往来の無事など公の安泰を祈るものであったが、成立時期が下ると公から天皇や后、皇太子、太政大臣等の個人の安寧を祈るものが加わった。関白・摂政となった藤原忠平(880～949)の日記『貞信公記』では、修善の目的が明記されることは少ないが、病氣平癒等個人を対象としたものが中心であった。修善の仏事内容は明記されておらず、一部の記事から「修法」が含まれていたことがわかった。また、『貞信公記』では、修善と同時に経典読経の記事があり、修善は経典読誦等とは別の仏事であることが考えられる。以上のことから、『貞信公記』の修善の大半は、目的は六国史と同じく攘災ではあるが、その仏事内容は経典読経のような仏教的善業を行うことではなく、藤原道長の『御堂関白記』に記された修善と同様に密教の修法を指すこと考えられる。この成果は、下記の学会で発表した。</p>
2. 学術論文・学会発表等	<p>[論文等] 単「平安時代前期の修善」『印度学仏教学研究』第 71 巻第 2 号、日本印度学仏教学会（2023 年 3 月、査読有）</p> <p>[発表] 単「平安時代前期の修善」日本印度学仏教学会第 73 回学術大会（2022 年 9 月 3 日、オンラインリモートシステム開催）</p>
3. 今後の課題	<p>今回取り上げた『貞信公記』には数多くの仏事記事が含まれ、10 世紀前半の仏教史を考える上で有益であるが、本日記を用いた研究は政治史研究が中心であり、仏教信仰に関する研究はほぼない。そのため今後は、『貞信公記』に記された公私の仏事のなかで、攘災に関わる仏事を取り上げて、社会状況に関わる信仰のあり方を解明する。加えて、忠平の個人的な仏事から、父祖への供養や氏寺に関する考察を通して忠平個人の信仰を明らかにしたい。</p>